2023.4 no.94

aaca

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

第六回日本建築美術工芸協会賞「長岡平和の森公園」
（撮影：飯田郷介）

表紙解説

第六回 日本建築美術工芸協会賞受賞作品

日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会の目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含む）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績があった個人またはグループが選ばれます。

第六回日本建築美術工芸協会賞受賞（1996年）
受賞作品　長岡平和の森公園（長岡市本町3丁目）
受 賞 者　上山良子

〈選考委員講評〉 委員長　内井昭蔵
委　員　曾田雄亮　栄久庵憲司
近江　栄　澄川　喜一（敬称略）

この計画の一番の見どころは、小川を取り込んで川の両岸に展開された環境作りであろう。堤のノリ面を利用して客席を作り、対岸もゆるやかな緑の傾斜地に作り変え、一体の景観に計画した時点でこのデザインは成功を約束されたようなものだと思う。河川堤を変更する事自体作者が語っているように、規則を変え関係者を説得するのに大変なエネルギーが必要であったであろう事は想像に難くはない。

戦争中この地で亡くなられた方々の鎮魂の像を囲みやわらかな緑の芝生が広がり、前面の石組の舞台で締めた緩急の構成は絶妙である。夏の間は水量も減り子供が川遊びをすると云う。本来この様な地形は町のどこにも見られるものだが、それをこのような清々しい公園に作り変える事こそが、やたらに彫刻を置くことしか能のない昨今の環境造形指向に対し、心強い警鐘となって好感の持てる作品になっている。

（撮影：飯田郷介）

CONTENTS

■令和 4 年度　第 34 回 aaca 設立記念総会
aaca 設立記念総会　4
第 5 回 BOX 展表彰式　5
第 32 回日本建築美術工芸協会賞表彰式　6
「AACA 賞を受賞して」　仲　俊治　宇野悠里　8
「芦原義信賞を受賞して」
山五十嵐こども園 ～村のように園をつくり、園のように村をそだてる～
東海林　健　9

■会員活動レポート
ごあいさつ　渡辺弘道　10
第 17 回 国際タペストリー・トリエンナーレ 2022
五十嵐通代　11
織物の茶室｜富士山頂茶会　橋口新一郎　12
展覧会活動報告　13

■連載　逓信建築にみるモダニズム再読　第 3 回（最終回）
國方秀男の日比谷電電ビル　横田昌幸　16

■法人会員の設計事務所を訪ねて
日本設計でのプロジェクト　山下博満　18

■会員交流委員会だより
第 16 回 aaca 長野・松本・茅野地区建物視察会
斎藤博太郎　20
建物視察会に参加して　田上竜也　22

■フォーラム委員会だより
第 200 回 aaca フォーラム開催報告
長谷川智恵子さんの講演会「素顔の巨匠たち」　柏尾　栄　24

■情報文化調査委員会だより
「市中の山居」を探るキーが“池”に？ Ⅲ　栗田祥弘　26

■事務局だより　28

▶▶ 5

▶▶ 7

▶▶ 20

▶▶ 22

▶▶ 24

令和４年度　第 34 回 aaca 設立記念総会

●日　時　令和４年 12 月 14 日（月）
受付 14：30　開始 15：00 ～
●場　所　建築会館　1F ホール
（東京都港区芝５丁目 26 番 20 号）

東條会長　挨拶

本日は一般社団法人日本建築美術工芸協会 第 34 回設立記念総会にご出席をいただき大変ありがとうございます。昨年、一昨年と新型コロナウイルス感染拡大のため２年続けて中止となりました。本年は、最近のコロナの感染状況などを鑑み、実施することといたしました。

さて、当協会は平成元年（1989 年）に芦原義信先生により設立され、今年で 34 回目の設立総会を迎えました。設立以来、協会の理念として【文化的都市の創造を実践する為に、建築･美術･工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い健康で文化的な空間創造に寄与する】を掲げています。

当協会のホームページに会報バックナンバーがあり、その会報創刊号巻頭に「創刊にあたって」と題した芦原先生のお言葉が掲載されています。その中で、「この協会は、建築家や、美術家、工芸家が協力して、わが国が世界の文化大国になるため頑張ろうということではじまったものなのです。」とのお言葉とともに、その年に村野藤吾賞、吉田（五十八）賞の二つの賞を取られた「東京サレジオ学園」（坂倉建築設計事務所　阪田誠造氏）について、「この建築が建築主のみならず多くの関連芸術家の努力でできあがっている。」続けて、「あくまで近代建築の正統派として、建築家、彫刻家、家具設計家、ガラス工芸家、テキスタイルデザイナー等が協力して構成した、素晴らしい空間なのです。」そして最後に「このような本格的な建築が誕生することを心より望むものであります。」と書かれております。

このお言葉にありますように、当協会は「建築とアートの融合による美しい景観・芸術性の高い文化的な環境」を創造する、このことを目標に今日まで様々な活動や情報発信・自己研鑽を続けて参りました。

残念ながら、この３年間は、新型コロナウイルス感染拡大により様々な制約があり活動自体が縮小されてきました。しかしながら、このような状況ではありますが、会員の皆様のご努力で、制限はあるものの、オンラインの活用や様々な工夫により、「BOX 展」「日本建築美術工芸協会賞」のほか「aaca フォーラム」「建物視察会」「景観シンポジウム」「aaca サロン」などの事業活動を実施して参りました。さらに、この３年間の特筆すべき活動として「地域創生」をテーマに、自然・歴史・文化など地域が持つ「価値・特徴」を見出し、それを生かした創造的な「まちづくり」「地域つくり」を取り上げ「地方創生が生み出す景観」と題して「連続講演会・シンポジウム」を開催しました。また皆様のご協力をいただき、その成果を書籍として出版することができました。このような活動を通じて、人々の移動や交流が制限される中でも、「美しい景観・芸術性の高い文化的な環境」に接することともにいられる環境があることが、人々の生活環境に潤いを与え豊かなものにしていくものと確信しております。

いまだ続くコロナ感染状況の中でも、国内の社会活動は徐々に動き始めたように思います。同様に協会の事業活動も活発な活動が期待できる状況になると思います。会員の皆様のさらなる創造的な企画活動や発信を期待しています。

本日は、この後法人会員であられる「ヘラルボニー」様にご講演をいただきます。ご講演を楽しみにしております。

また、設立総会後、第５回 BOX 展及び第 32 回日本建築美術工芸協会賞の表彰式が行われます。受賞されます皆様には心よりお祝いを申し上げます。

今年も残り２週間ほどになりました。来年は新型コロナウイルス感染症が早く収束することを願うとともに、皆様にとり、さらなる発展と創造性が発揮される年になりますようお祈り申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

記念講演

法人会員　株式会社ヘラルボニー
代表取締役社長　　松田崇弥様
同　代表取締役副社長　松田文登様

MISSION

知的障害。その、ひとくくりの言葉の中にも、無数の個性がある。豊かな感性、繊細な手先、大胆な発想、研ぎ澄まされた集中力･･･“普通”じゃない、ということ。それは同時に、可能性だと思う。僕らは、この世界を隔てる、先入観や常識という名のボーダーを超える。そして、さまざまな「異彩」を、さまざまな形で社会に送り届け、福祉を起点に新たな文化をつくりだしていく。

（株式会社ヘラルボニー　HP より）

第 5 回 BOX 展表彰式

審査講評　審査委員長 岩井光男（aaca副会長）
表 彰 式　出席者
最優秀賞　ワクイ・フー　Who
優 秀 賞　小野山和代
佳　　作　池田嘉文　青木邦眞　青木峰雄
特 別 賞　郡山あられ
オーディエンス賞　上村伴子

第 32 回 日本建築美術工芸協会賞表彰式
AACA 賞・芦原義信賞（新人賞）選考結果

古谷誠章選考委員長　選考報告

昨年に引き続きコロナ禍での審査となりましたが、それでもその小康の間を縫って、一次審査には海外から渡日した川上審査員をふくめて、全審査員が集まっての作品パネルによる選考、現地審査は複数名の審査員で実行し、公開による最終審査は応募者と審査員が一堂に会しての審査を終えることができました。応募者各位をはじめ、準備に当たられた関係者にこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。

今年は 58 作品の応募がありました。建築の規模、地域、内容ともに多岐にわたる優れた作品が集まりました。中でも現地審査に進んだ 13 作品は、いずれ劣らぬ魅力に溢れたもので、審査は容易ではありませんでしたが、結果としては AACA 賞審査にふさわしい力のこもった入賞作品を選出することができたと思います。

そうした中で、多くの審査員の推薦により今年の AACA 賞に選出されたのは、南軽井沢の林に囲まれた《写真家のスタジオ付き住宅》で、海外でも高く評価される写真家の想いに応えて、建築家が独創的な空間を提案し、さらに写真家がそれを相乗的に使いこなすという、いわば創造的な協働による素晴らしい作品となりました。

AACA 賞に入賞経験のない新人に贈られる芦原義信賞には、小さな断面の一般的な木材によるトラス架構で造られた《山五十嵐子ども園》が選出され、その集落的な外観、小空間の連鎖がつくり出す温かい雰囲気が、子どもの保育空間としてこの上ないものと高い評価を得ました。

この両者に続く優秀賞として、それぞれに独創的な魅力に溢れた 3 つの作品が選ばれました。「遠島」の島である隠岐島の《Entō》は豊かな自然景観の中に対比的に置かれた CLT による直線の造形が美しく、また景色を最大限に楽しむことのできる宿泊施設です。それに対して那覇市の中心部に建つ《那覇市文化芸術劇場なはーと》は、緩やかにカーブする首里織をモチーフとする HPC グリルが眼を惹きつける丸みを帯びた外観が特徴的です。また廃校を再生した森の駅《yodge》は、宿泊客であるビジターの施設であると同時に地元住民にとっても日常的な居場所となっており、両者の交流拠点としても有効に機能しています。

美術工芸賞は木曽の奈良井宿の重要伝統的建築物群保存地区にあるかつての造り酒屋を再生した宿泊施設の《歳吉屋 －BYAKU Narai－》が、各所に施された漆や和紙など伝統工芸の魅力を現代的な空間の中に感じさせるもので秀逸でした。また、同奨励賞に選ばれた《湯野浜・亀や　あかがね》は温泉ホテルの一室を芸術的に再生しようとする試みで、施主の取り組みが大変意欲的なものとして評価されました。

特別賞《Port Plus 大林組横浜研修所》は、木造による高層建築への挑戦であり、その技術的価値はもちろん、極めて秀逸な建築意匠としての表現となっていました。また奨励賞に選ばれた《大阪中之島美術館》《ミュージアムタワー京橋》はともに力作であり芸術的な評価も高く、《台地の FORTE》も独特の存在感のある建築でした。

あいにく紙幅がつきましたが、今年も示唆に富んだ多くの入賞作品を選出することができ、審査委員長として光栄に思います。

第 32 回 日本建築美術工芸協会賞 受賞者

AACA 賞

「写真家のスタジオ付き住宅」
作　者：仲俊治　宇野悠里
所在地：群馬県甘楽郡下仁田町西野牧

芦原義信賞

「山五十嵐こども園」
作　者：東海林健 / 平野勇気
所在地：新潟市西区五十嵐三の町西

優秀賞

「Entō」
作　者：建築・監理
MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO /
原田真宏　原田麻魚　野村和良
所在地：島根県隠岐郡海士町福井

「那覇文化芸術劇場なはーと」
作　者：香山・久米・根路銘設計共同体
長谷川祥久、兒玉謙一郎、根路銘剛次、
望月麻衣、角沢聡子、岡本賢吾、香山壽夫
所在地：那覇市久茂地三丁目

「yodge」
作　者：照内創　SO&CO.
土橋悟　都市環境研究所
所在地：福島県玉川村四辻新田字村中

奨励賞

「大阪中之島美術館」
作　者：遠藤克彦（株）遠藤克彦建築研究所
所在地：大阪市北区中之島

「ミュージアムタワー京橋」
作　者：中本太郎・矢野雅規・小林哲也・李宇宙
所在地：中央区京橋

「台地のFORTE」
作　者：佐藤達保
所在地：大阪市阿倍野区橋本町

特別賞

「Port Plus 大林組横浜研修所」
作　者：大林組　設計本部
伊藤泰、堀池隆弥、伊藤翔、高山峻、太田真理、
辻靖彦、岩井洋、西﨑真由美
所在地：横浜市中区弁天通り

美術工芸賞

「歳吉屋 -BYAKU Narai-」
作　者：竹中工務店　美島康人・長谷川裕馬
所在地：長野県塩尻市奈良井

美術工芸賞奨励賞

「湯野浜・亀や あかがね」
作　者：加藤詞史（加藤建築設計事務所）・
岩田英里（岩田組）・阿部公和（亀や）
所在地：鶴岡市湯野浜

AACA 賞を受賞して

仲建築設計スタジオ
日本建築美術工芸協会会員
仲　俊治・宇野悠里

移動と体験

「写真家のスタジオ付き住宅」は森の中に３方向に枝を伸ばすように拡がった平面形状をしている。既存の樹木を避けながら建てる、という制約のなかから生み出されたものだったが、３つの枝先の伸びる方位や樹種や地面の傾斜などから、それぞれの枝先が全く違った場所になるだろうということは、早い段階から想像することができた。

私たちにとっての大きな発見があったのは、枝先を繋ぐ経路を考え始めた時だった。３方向に伸びた平面形状は、樹木を避けて３枚の壁を森の中に建てることから始まった。その壁に沿った表と裏に、廊下状の厚みのない空間が展開する（樹木を避けるとどうしてもそうなる）。表と裏は壁に開口を開ければ一瞬で移動できるが、それはやめようと考えた。

一人の写真家が創作と生活の切れ目のない日常をこの建築の中で送る。緊張感をもって暮らしたい、というのが最初の一言であった。移動の経路を引き延ばし、その経路の中に変化のある空間体験を織り込むことによって、日常を豊かにすることができるのではないかと考えた。枝先から別の枝先へ、または、ある枝先の表から裏へ、どこに行くにも３方向の枝の交点である天窓室を経由しないと移動することができない。スタジオからオフィスへ、オフィスから寝室へ、いつでも天窓室を経由して歩き回ることになる。

天窓室に向かって３枚の壁は高くなっていく。一方で外壁は一定の高さで低く抑えられているので、天窓室に近づくと徐々に気積が大きくなり、大きな空間の中に包み込まれているような感覚をもつ。一方で枝先に向かう時は、天窓室近くでは頭上高くにあった登梁が移動するに従って徐々に視界に入ってきて、気積が小さくなっていき、そのまま外に押し出されていくような感覚をもつ。こういった感覚は、太陽の方向や外の明るさによって大きかったり小さかったりし、室内での移動体験でありながら、常に外部環境と自分が関係しているという感覚をもたらすことにも気づいた。

ここで発見したのは、流れ、体験、シークエンス、といった中に建築があるということの豊かさであった。

創作と共鳴

クライアントの数少ない要望のうちのひとつが「黒い壁」であった。人物が最も美しくみえるのが横からの光と黒い背景だという。設計段階から共に黒い壁を訪ね歩き、現場においては職人も加わって試行を重ねた。その他にも、スタジオの床や天井の塗装、家具や建具の素材や仕上、みえがかりとなるあらゆる金物類、それらひとつひとつを既製品から選ぶのではなく、オリジナルなものとしてつくりあげていった。

この共同作業の背景にあったのは、クライアントと私たちとの間にあった、空間への期待と共鳴であったと思う。創作への深い理解をもったクライアントが、私たちの提案を受け止めて咀嚼し反応を返す。この往還は常に緊張感を伴ったものであり、また幸福なものであった。クライアントは建物が竣工したその時から、まるで昔からそこに住んでいたかのように、新しいスタジオでの創作と生活をはじめ、訪れる人が皆驚いたという。

森の中での職と住

私たちは職と住を混ぜることによる空間や生活の豊かさを考えてきた。接点が増え、空間の意味が多重化する。グラデーショナルな距離感の調整が重要であり、建築が閉じずに社会と関係を持つ。一方で、社会的な意味での周辺環境から切り離された森の中で何を考えればよいのか、試行錯誤であった。

「光を追いかけていて一日が終わってしまうのが幸せ」とクライアントに言われた。その時、この建築は太陽や環境と呼応していて、「開かれている」のだということに気づき、ただ個人のための閉じた箱をつくったのではなかったのだということを自分たちなりに理解したように思う。

森の中で３方向に枝を伸ばすように建つ

移動経路を兼ねたオフィス。窓の外には紅葉の庭が広がる

スタジオから天窓室方向を見る。黒い壁と床の空間

撮影：鳥村鋼一

芦原義信賞を受賞して

山五十嵐こども園
～村のように園をつくり、園のように村をそだてる～

株式会社　東海林健建築設計事務所
日本建築美術工芸協会会員
東海林　健

クライアントにはもちろん、その土地の素材や産業、気候や風土といったプロジェクトの固有性に根差し寄り添い、「そこにしかない建築.そこにしかない活動.そこにしかない幸せな関係」作りを、私たちは目指してまいりました。その成果のひとつである「山五十嵐こども園」が、図らずも、今回このような形で評価して頂き、栄えある芦原義信賞を賜りましたことはこの上ない喜びであり、選考して頂きました委員の皆様には深く感謝申し上げます。

「しぜんに、しぜんと」を理念とする「山五十嵐こども園」は新潟市郊外の古い村に位置します。村の小道をくねくねと抜けた先の自然豊かな砂丘の頂に建つ木造平家建の園は、歩を進める毎にパラパラとシーンやニッチを展開し子供達に多様な拠所を提供します。保育室、更には園舎、園庭を越えて周辺地域までをひとつの連続体とした「大きな保育環境の構築」を目指しました。

「この園、誰のため、何のため？」をテーマとして、保育の研究者、保育士、父母、地域住民を巻込みワークショップを重ね、少子高齢化の時代に、衰退が進む郊外の敷地で園を建替することの意義について、子供達のため村のためとなる園のあり方について対話を積み上げ、「村のように園をつくり、園のように村をそだてる」をビジョンとして定めました。子供たちが保育室の外に出ていき、園庭やまちにあふれる遊び場を活用することと同時に、こども園を地域の交流の場として解放し、村の人々にこども園に来てもらう「境界の弱い拡張するこども園」を提案。子供達に多様な学びと遊びが生まれる環境作りを目的に、保育をひとつの室だけではなく他の室に開き、屋内を自然あふれる屋外に開き、こども園を村に開き、それぞれの「境界」をいかに溶かすのかが課題となりました。

大きな材が運べない敷地条件のもと、現場で小さな材を組み合わせて作る木製トラス梁により大きな保育空間を実現。頂点が上を向いたトラスと下を向いたトラスを組み合わせ、連続する屋根を構成しています。トラスの端部を間仕切り壁の上から外し、平面と屋根をずらすことで、保育室毎に表情の異なる環境を作り出すと同時に、間仕切り壁の上部に抜けを作り、それぞれの環境を緩やかに繋ぎます。保育室―縁側―土間―園庭を大きな屋根で繋ぎ、屋内外を横断する学びと遊びを支えています。

村の特徴であるくねくねとした細い道を園舎に引き込み奥まで続く外廊下とすることで、村の延長に子供達の笑顔が立ち現れるように計画。外廊下では、くねくねとした道がひだのような空間を作り出し、子供達の拠り所となっています。園をきっかけとした地域交流を広げるために、前面に子育て支援室やデッキ広場を設けることで、近隣農家の市などのイベントを可能とし、地域活動と園活動を混ぜています。

開園して暫く経ち、木質木造の園舎が「施設」ではなく「みんなの家」のような温かな環境で保育ができると保育者や保護者から喜びの声をいただいています。

子供達が屋内外に広がるいろいろな環境を横断的に活用するにつれ、年齢も横断し、異年齢遊びや異年齢の見守りが自然発生的によく見られるようになりました。また、子供達が外にいる時間が長くなり、それを眺める散歩中のおじいちゃん、おばあちゃんの姿が増えました。園舎の軒下では、見送りやお迎えで保護者間の情報交換が行われています。

この「境界の弱いこども園」は子供達の学びと遊びに柔軟性と拡張性を生み、みんなの思い思いに応え、村に新しい日常を作り始めています。

「園を村のように作り、村を園のように育てる」まさにその芽が吹き始めているようです。

ごあいさつ

日本建築美術工芸協会会員
渡辺弘道

この度、入会いたしました渡辺弘道です。大学卒業後、建築設計事務所を経て、現在は野村不動産（株）で不動産開発をしています。

市街地再開発事業、マンション建替え事業を担当しています。また、PPP/PFI プロジェクトや海外事業、インテリア家具販売 / リノベーション事業を所管したこともあり、建築・美術・工芸・インテリアにはとても興味があります。還暦をむかえ今後の活動を考えていた時、本協会を知る機会があり入会させていただきました。

WORK

再開発 / 建替え事業は、本協会メンバーの皆様を含め、様々な関係者の方々の協力が必要です。特に地権者とのコラボレーションは重要で、時間はかかりますがいろいろな課題を丁寧に、一歩一歩解決していくことが何よりも大事と考えています。

新宿の西富久再開発地区には、建物の屋上に「戸建て風」の地権者用住宅があります。合意形成がなかなか進まないときに、戸建てに住み続けたいという地権者の意向をうけ、早稲田大学の支援を受けて計画されました。マンションの区分所有者にはなりますが、従前に住んでいた時のように、庭いじりなど自分ですることができます。

時間がかかる事業ですので、想定外のことが起きます。港区のフランス大使館の敷地の一部を定期借地して、住宅・大使館を建設した PPP/PFI プロジェクトでは、参画後にリーマン・ショックでマーケットが暴落してしまいました。また、着工前に東日本大震災が発生しました。大使館員と連絡が一時取れなくなりました。日本の震災被害状況を説明するために本国に出向きお願いをして、契約条件を見直してもらいました。

昨今の浸水被害、コロナ、ウクライナ戦争など、予期せぬ思いもよらないことがおきます。再開発 / 建替え事業の長いスパンのなかでは、「想定外のことが起きることを想定して」、事業をすすめるようにしています。

西富久再開発のペントハウス住宅

PRIVATE

「多趣味」「認知防止」「友達ネットワーク」「健康寿命」がキーワードです。

北軽井沢のキャンプ場に 3 ～ 4 回 / 年、16 年ほど通っています。妻と犬の 3 人でゆっくりするのが好きで、キャンプ場をベースにドライブ、登山、ゴルフなどしています。50 歳を過ぎてからジャズ・ピアノを初めました。ジャズ・バーに通いセッションに参加できるよう、特訓中です。妻とウォーキング & ジョギングするのが日課で、コロナ渦のなかはじめました。たまに大会も出場しています。膝の怪我でフルマラソンはもう走れませんが、ハーフマラソン 2 時間以内が現在の目標です。お酒はビール党でしたが、最近は日本酒とウイスキーに凝り始めました。在宅勤務が増えたので、自宅で（飲みすぎないように）楽しんでいます。

様々な分野で活躍されている本会員の皆様と、お会いできることを楽しみにしています。今後ともよろしくお願いいたします。

フランス大使館の住宅

マラソン大会

キャンプ

第 17 回 国際タペストリー・トリエンナーレ 2022

新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員
五十嵐通代

17th International Triennial of Tapestry in Lodz, Polandに参加して

2022 年 10 月 8 日から 2023 年 4 月 15 日までポーランドのウッジで「第 17 回国際タペストリー・トリエンナーレ 2022」が開催され出品することになりました。

ウッジはワルシャワから電車で 2 時間ぐらいのポーランド第 3 の都市でテキスタイルが盛んな都市です。

会場は、かつての紡織工場が中央染織博物館となったところです。3 年に一度の展覧会開催は困難な国の状況を乗り越えて 50 年続いています。

ポーランドでの「テキスタイルによる表現」の原点は社会主義政権下で表現の自由がなかった時代にタペストリーを通して表現する作家達が現れた事にあるそうです。私は 20 代の時に、その中の 1 人アバカノヴィッチが日本の国立近代美術館で開催した個展を見て強く衝撃を受けました。そのゆかりのあるポーランドの展覧会に 50 年後に参加出来たことは嬉しいことでした。

今回の展覧会は「Tangled State（もつれた状態）」がテーマです。世界各国から 477 点の応募があり、入選した 28 カ国 54 点が展示されました。ポーランドから 13 人、二番目に多い日本から 5 人が参加しています。

審査員は 5 人で現代アートに携わっている方々でした。今後テキスタイルに造詣を深めていこうという感じでした。

日本人の審査員としては香港の CHAT（Centre for Heritage, Art and Textile）の立ち上げを担当し、現在チーフキュレーター兼館長の高橋瑞木さんが参加されていました。審査の基準はテキスタイルしての造形と現代作品としての制作意図、メッセージに重点を置かれたそうです。

金賞はモウミタ・バクサさん（インド）、インドにおける女性の制約された環境をインドに伝わる技法で表現され、刺繍の技がとても見事でした。

銀賞はジャンナ・ペトレンコさん（ウクライナ）、銅賞はカーチャ・フェレさん（スロベニア）。日本からの出品者は日本のファイバーアートの第一人者である久保田繁雄さん、舞台美術で活躍されている八代利江子さん、若手の田代葵さんはレシートを使用した織作品、風の様な作品の濱田菜々さんでした。

同時に開催された Young Textile Art Triennial 2022 は若い作家を対象とし企画されたものです。次の世代を見据えて、育てていく企画は素晴らしいと思いました。前回の Young Textile Art Triennial 2019 では日本の女子美術大学の学生が金賞を受賞したそうです。

ポーランドの自国だけではなく、世界に向けた取り組みを賞賛したいと思います。

五十嵐通代

八代利江子

久保田繁雄

田代葵

金賞作品

織物の茶室｜富士山頂茶会

建築家
日本建築美術工芸協会会員　**橋口新一郎**

「現地集合 現地解散」 2022年9月に開催された富士山頂（烏帽子岩神社・吉田口登山道八合目）での茶会は、山の掟との戦いなど、一期一会にも程がある大変厳しい企画でした。神道扶桑教冨士山天拝宮や、富士山クラブのサポートを受け、7月にロケハンで山頂まで登った後、吉田口の河川流域を歩いてみると、支流を庭に引込んだ邸宅や、動力の一部として活用した撚糸工場など富士北麓独特の生業や風土を伺い知ることができました。ここで生産された糸や織物は、富士吉田市の東裏地区と呼ばれる問屋街（絹屋町）でお金に代わり、西裏地区と呼ばれる歓楽街で消費されるといった、富士山の支流からの恩恵に浴した当時の栄華や、河川と住まいの密接な関係が存在したのです。今回は、織物の茶室に郡内織の糸を用いるなど、江戸時代より積み上げられてきた高い技術の継承と衰退をアーカイブ化するにとどまりましたが、こういった活動は長く続けることが大切です。沼津御用邸で進行中の企画では、日本建築美術工芸協会の皆様のお力添えをいただきながら、日本の伝統的な技術や感性をより深く掘り下げた茶会にしたいと思っています。

主　催：神道扶桑教冨士山天拝宮・橋口建築研究所
協　賛：京都村正・赤膚山元窯・宮本屋撚糸・甲斐絹座
協　力：北口本宮冨士浅間神社・山梨県絹人繊織物工業組合・富士吉田織物協同組合
山梨県撚糸工業組合・丸幸産業・三峰染織工業・フジチギラ・前田源商店
後　援：毎日新聞社・富士山クラブ・富士山自然文化情報センター・日本建築美術工芸協会
塚本学院校友会（大阪芸術大学・同短期大学部・大阪美術専門学校）・帝塚山学園同窓会

展覧会活動報告

■ 第 9 回日展

日展とは、日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の 5 部門からなる日本最大の総合美術展です。工芸美術は陶磁・染織・金属・漆・人形・革・七宝・木・竹藤・硝子・紙・ジュエリー・その他の種別があります。

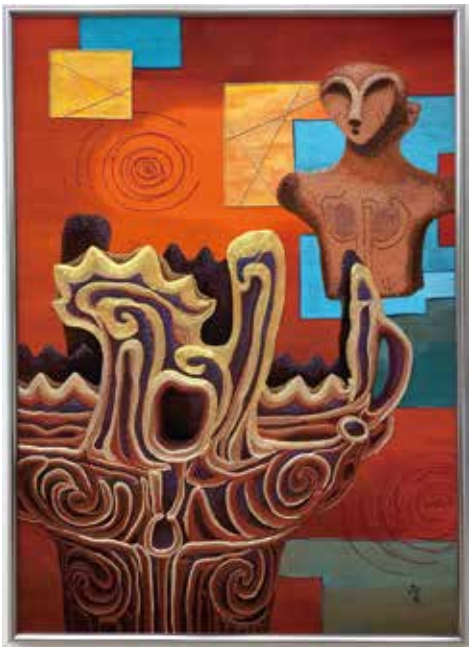
今回は aaca から 5 人の工芸作家の作品が展示されました。

山崎輝子　革
「往還（Ⅲ）」 coming and going（Ⅲ）85 x 130cm

山崎輝子（日展会員）
革の表皮と内部との境界を感じながら「往」と「還」が互いに呼応しあう力から生まれる形象を視覚化する事を試みた。その内なる力が多様な表現を生む道筋を展開する事で、時間や空間を感じられる作品になるように努めた。

山崎和子　染
「Ever Changjng Time」 175 x 90cm

山崎和子（日展会友）
グラデーションとストライプの構図で表現する事と、パネルを重ねる事で、錯覚の中から生まれくる空間と空間の重なり、そして変化して生まれてくる未来への新たな「時・空間」感じてもらえるようにと思い制作してみました。



品川未知子　刺繍
「縄文の祈り ... 火焔」
146 x 105cm　Prayer in the Jomon Periond...
Flame pottery

品川未知子
長岡市馬高縄文博物館で火焔土器を見た時に神秘的で美しく力強い造形に驚き、表現したいと思い魅せられて 4 作目になりました。戦争のない平和が続いた縄文時代の火焔土器は満月や新月の時に、神事で祈りをささげる時や煮炊きにも使われたようです。祭りの前夕暮れ時に神々しく輝く土器とミス馬高（土偶）の構図で、火焔土器は丸金、丸銀糸、桂縒り糸で駒掛縫、ミス馬高は利点縫で刺して制作しました。

神まさこ　その他（錫・和紙・銀箔・石膏）
「溢れる想い」
Exuberant feeling 194 x 97cm

白野順子
世は、新しい時期、世代、世界へつなぐを表すものとし、繋ぐは気持ちや関心を離れないようにし心と心を結び付けて厳密な関係をという意味で流れ、宇宙を心掛けてデザインしました。全世界の人々が素晴らしい夜明けを見られる事を又、宇宙の中の地球を大切にし、その美しさが動き続ける光景を思い続けたい。色々な気持ちや関心が時を人間が繋いでいき、美しい物を作り続けたいと制作しました。細かいシルク布を縫い合わせ繋いでその気持ちを込めて。

神まさこ
溢れるような感情を、想いを込めて、静かに心の中を流れ落ちる様を表現したくて制作いたしました。喜怒哀楽は陰陽とも取れる事から、陰にひそめて光る様子も表現したく、銀箔に和紙を張ることにより、光を押さえて表現いたしました。

白野順子　染
「世・繋ぐ」 mind togther 162 x 130cm

■ 第 21 回 若草会展

女子美短期大学で日本刺繍を学び、卒業後も制作活動を続けている作家グループです。

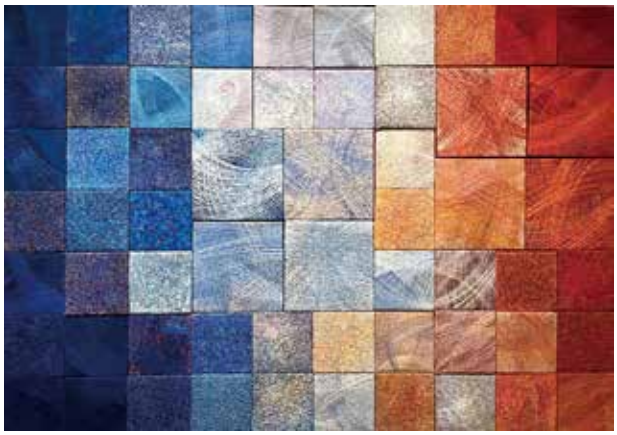
「刺繍」という限りなく自由で美しい糸の造形美術に魅せられ、自己表現を追求し、2 年に一度制作発表しております。コロナ禍 3 年ぶりに 21 名参加での開催となりました。

日本刺繍は最古の「天寿国曼荼羅繍帳」「繍仏」「着物」「帯」「明治中期の海外への輸出品の工芸品」として生産されてました。刺繍は「刺」の裁縫を意味する実用的世界と「繍」の装飾的世界の 2 つ意味があるようです。日本刺繍は着物文化の衰退により見ることが少なくなりました。私達は日本刺繍の技法を残し、現代アートとして生かして活動していきたいと思います。

今回は aaca 会員の 2 人の作家が出品してます。

品川未知子　「縄文の祈り ･･･ 新月夜」

品川未知子
長岡市馬高縄文博物館で火焔土器を見た時に、素晴らしい造形美と技術に驚き、刺繍で表現したいと思いました。土器は満月や新月の祭りの祈りをささげる時や、煮炊きにも使用されようです。新月の夜、月のない星空をイメージし、紫の箔置きと十字乱点でインドサリーの残糸の太片縒糸を駒掛けし、曼珠沙華乱点の技法で、日本刺繍の美しい糸の造形を着物文化の衰退で見られないなった技法残し、現代アートに生かして制作しました。



高須好子　「大地」

高須好子
大地から望む空、海、太陽からなる空気感をイメージして制作しました。
今回は絹糸ではなく、暖かみを感じる綿糸を使用し、糸の重なりで奥行き感、糸の動きで風を表現出来ればと思いました。
大小のパネルの組み合わせ、色の配置は一番苦心したところです。
そして、その先に希望を感じてもらえればと思っています。

■ 第 6 回 フレスコ展

2022 年 12 月 16 日から、銀座洋協ホールでフレスコ展が開催されました。

絹谷幸二　「春・花運ぶクリスティーナ」

日動画廊新年会にて　絹谷幸二ご夫妻（1 月 12 日）

大野 彩　「輪廻・継承」

大野 彩
私自身が持つ身近な物、祖母、母、自分の衣生地を組み合わせ画面周囲に張り込みました。伝わるものを作品に取り込む行為です。中央部は過去に描いた“月に照らされる崖岩”をモチーフにした作品を再度モチーフとして設けました。ここに私くしの専門とする石灰を使用しています。常日頃が、このような繰り返しによって成り立ち、その穏やかさ故、有り難さに気づかないまま在ることを形にし、見えるものとしようという試みです。

御正牧子　「波奈銀河（はなぎんが）」

御正牧子
二十年以上も、毎年冬枯れの時期に、沢山の可憐な白い花をつけてくれる、ミニカトレア。
それはまるで星座のよう。
波打つ様々な形の葉っぱや根っこは銀河のよう。
宇宙のたくましい命の流れ。
いつしか私はカトレアの銀河の森に入り込み、自由に心を遊ばせます。
こっちの葉っぱを登って、あっ、今度は すべり台。
ひとときの幸せ。
今回はひとつの 試みとして、小さな同形のパーツをパネルに貼って大作にしました。
試行錯誤の連続です。

連載　逓信建築にみるモダニズム再読　第３回（最終回）

國方秀男の日比谷電電ビル

アーバンエコロジー研究所代表
元NTTファシリティーズプリンシパルアーキテクト
日本建築美術工芸協会会員
横田 昌幸

はじめに

NTT 日比谷ビル（旧日比谷電電ビル、以下、日比谷ビル）は 1961 年日本電信電話公社の本社ビルとして竣工し、60 年にわたり NTT グループの本社を収容する大規模オフィスビルとして機能してきた。昭和 36 年（1961 年）日本建築学会賞受賞建物 DOCOMOMO Japan 100 選の 56 番目の建物でもある。設計者、國方秀男は千代田電話局や関東逓信病院などの名建築を生み出した電電公社を代表する建築家であり、日比谷ビルはその國方の集大成とも言える時代を画する建築であった。「内幸町１丁目街区再開発」の決定により、惜しまれながらも、現在解体工事が進められている。

オフィスビルは 1960 年代後半には高層ビル化の時代を迎え、1968 年には 36 階建ての三井霞が関ビルが竣工する。建築を構成する建築材料や設備は部品化、システム化により工業製品化が進んでいく訳であるが、カーテンウォールやシステム天井、パーティションなど、その端緒と見られるものが日比谷ビルには多く見受けられる。また新しく登場した照明、空調などのオフィス環境制御を行う建築設備をオフィス計画に巧みに融合させていることは、特筆すべきところである。日比谷ビルはその後のオフィスビルのプロトタイプとして大きな影響を与えることになる。

最大規模の事務所建築の誕生

1962 年に建築基準法に地区容積制度が導入されるまで、都市計画の観点からは市街地建築物法による 100 尺制限（絶対高さ制限）と建蔽率 70% を継承しており、現在の我々に馴染みの深い容積率の規定は存在しなかった。従って日比谷ビルの設計においては 31m の高さ制限と 70% 建蔽率の中で最大容積を確保するため、設計の工夫により、通常より１層多い（丸ビル、新丸ビルなどは８層）地上階９層としている。こうして地下４階地上９階、延床面積 75,489㎡の、当時では東洋最大と言われた旧丸ビル（60,345㎡）・旧新丸ビル（65,600㎡）を超える最大級の事務所ビルが誕生した。

NTT 日比谷ビル　日比谷通り側外観　2022.4

空調がつくる第3世代オフィスビル

日比谷ビルの特筆すべき特徴の一つに、全館空調を初めて導入したことがある。実際、この全館空調がオフィスの平面プランを大変革したとも言える。空調がない時代のオフィスは、夏の高温、高湿度を克服するために通風を確保することが課題で、室の奥行きを浅くし、間仕切り壁に欄間を設けて夏季の通風を取っていた。自然採光と合わせてオフィスの奥行きは 7.5m 程度までとするのが常識であった。日比谷ビルの基準階床面積は 6,000㎡と大きく先駆的なメガプレートオフィスと言えるが、外壁面から奥行きの深い 19m 幅のオフィスベルトが中央部のコアを取り巻く、センターコア形式の平面構成となっている。新しく登場した蛍光灯による人工照明と空調機械設備が、窓から遠い奥行きの深いスペースでも十分に執務可能な空間に変え、現代の超高層オフィスに繋がる大きな平面プランを生んだのである。

林昌二によれば、オフィスビルの歴史は大きく３期に分けられる。１期は煉瓦造や木造の低層の揺籃期のオフィス、２期は吉田鉄郎の東京中央郵便局などに見られる鉄筋コンクリート造のオフィスビルで、据え置き型放熱器による暖房設備はあるが冷房空調設備はなく、自然採光、通風を前提として作られているもの。第３期は全館常時空調の高層建築で現在のオフィスビルであり、モダニズム建築としては柱、梁のコンクリート構造の造形を美しく表して見せる第２期にその完成形があるとしている。

「この時期は第３期に移行するまでの半端な時代と片付けられそうですが、そうではありません。というのも、第３期のオフィスビルはまだ発展途上にある中途半端な存在だからで、むしろ第２期に、近代建築としての一応の完成が見られるからです。主な理由は空調設備との関係にあります。現在の空調設備は、建築一体論理と矛盾する存在で、建築物には両者の格闘の跡が、醜く刻印されるのが常だからです。両者が正常な関係に到達するのには、まだ相当な時間が必要と思われ、それに比べると第２期の建築物は空調のための空気の搬送という厄介な問題に煩わされず、現代建築の健康な姿を精一杯表現する事ができたのでした。」（誠実なオフィスビル・貴重な近代化遺産 2008　林昌二）

この「設備がらみの問題」というのを、國方は当初から近代建築の課題として捉えており、この日比谷ビルの設計においても、建築と構造・設備の整合をテーマとしていた。國方は新たな近代機械設備を収容する電話局や病院建築の設計の中で、使われ方の変化や設備の変化も許容する建築のあり方を追求しており、日比谷ビルにおいても、武藤清という当代随一の構造設計者の協力も得て、最も洗練された解を示して見せたのである。

31m の高さ制限の中で 9 層を入れるため、2 階から 8 階まで 3,384mm の同一階高で構成され、またその中でも廊下部分も含めて 2,600mm の高い天井高を確保している。これを可能にしているのは、大きな平面にバランスよく配置された耐震壁と、SRC 構造による高さ 700mm と空調機周りの高さ 400mm の扁平梁であり、スパイラルダクトのためのスリーブがあらかじめ一様に開けられていた。各階、1,000㎡毎に防火壁で区切られた四つのオフィス区画で構成されているが、空調区画はこれに合わせ、方位別に 4 ゾーンの各階ゾーンユニット方式が採用されている。ゾーン毎にエアハンドリングユニット（空気調和機）を設置し、ダクトにより天井面のアネモから給気し、部屋内リターンで廊下側のガラリからリターンを取る方式である。基本的には現代でも一般に採用されている方式で、完成度の高さに驚かされる。また空調をワンルームとするため、ステンレススタッドのフレキシブルな上下ガラリ付き可動間仕切りが全面的に用意され、多様な使われ方を可能にしていた。

環境をデザインするバルコニー

日比谷ビルの外観を特徴づけるのは何と言っても多層に重なり、四周に大きく張り出したバルコニーであり、この水平線が大きな立面を分割して日比谷通りに面して美しい景観を作っている。このバルコニーは逓信建築の庇スタイルの類型として理解されることが多いが、國方のバルコニーは、複数の機能を持たせた極めて合理的な環境装置であった。日比谷ビルではペリメーター空調を設けない代わりに、このバルコニーによる日照調整や、ペアガラスや当時開発されたばかりの熱線吸収ガラスなどの採用による、建築的な対処により環境の負荷低減を図っている。もちろん避難や防災面での機能や接地性のもたらす快適性なども併せ持っている。

近年ではシンプルな外装構成が好まれる超高層ビルにおいてもダブルスキンなどのパッシブな環境装置が外装に持ち込まれるようになっている。これからは ZEB（ゼロエネルギービル）が求められる時代であり、超高層オフィスビルにおいても建築設備システムと建築外装システムとが熱制御や日照制御や音制御において融合した優れたソリューションが提案されていく事と思う。第三世代オフィスの初めの扉を開いた日比谷ビルの建築と設備のバランスの取れたデザインは、多くの示唆を与えてくれている。

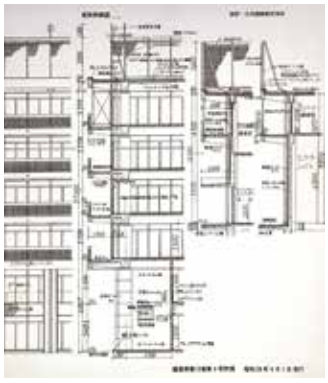
参考文献
1）「日比谷電電ビルディング」建築　1961 4
2）「誠実なオフィスビル・貴重な近代化遺産」2008　林昌二
3）逓信建築アーカイブス , NTT ファシリティーズ

センターコア・柱間 7m グリッド・空調ダクト　アクソメ図

ステンレススタッドパーティション・アルミグリッド天井

パーティション上部　青海波文様ステンレスパンチングメタルガラリ

下部　ステンレスグリル


矩計図　フルハイトのガラスサッシが四周を覆う

バルコニー　日比谷公園を望む 2022.4

日本設計でのプロジェクト

日本設計　プロジェクトデザイン群
PM･CMグループ 専任部長
日本建築美術工芸協会法人会員
山下 博満

前稿では、日本設計発足以来の経緯と、美術 / 工芸と関係の深い実積を紹介しました。今回は、私自身が日本設計で携わった､建築 / 都市 / プロジェクトのデザインを採り上げます。

●建築デザイン

アートが映える大空間

建築空間の骨格となる場所に、その空間と呼応するアートを設えることで､アートが空間に映え､空間は深みを増します。

・富山市庁舎（1992）のアトリウム

東西二つの棟に挟まれ､「開かれた市庁舎」を象徴する 8 層吹抜けのアトリウムには、市民の集まる 1 階と 2 階をつなぐ大階段があります。この階段に沿った曲面の壁に、大理石モザイクを埋め込みました。作家は、多摩動物園昆虫生態園と同じ上哲夫。市政 100 周年の富山市がモチーフです。

階段の上に大伴二三弥のステンドグラスを置き、足元には彫刻のような受付カウンターや水盤の石組を設計しました。

・汐留シティセンター（2003）のアトリウム

Kevin Roche と協働した超高層ビルの足元、旧新橋停車場から横浜へ延びていた鉄道の軸線上に、エントランスロビーを兼ねた 3 層吹抜けのアトリウムがあります。パブリックアートを配し、ダイナミックで国際性豊かな空間としています。アートディレクターは Sarina Tang、テーマは “Nature in Technology”、作家は Melissa Meyer（USA）、Matthew Ritchie（UK）、Zhan Wang（中国）。内装石材との取り合いや吊り方の検討など、建築とアートが並行して進行する設計は、スリリングな経験でした。

・東京倶楽部ビル（2007）のロビー

霞が関ビルと連絡通路でつながるオフィスロビーと、特許庁側エントランスの吹抜けに、ふたつのアートを据えました。前者は大塚新太郎による白い楕円体の作品、後者は上哲夫による巨大な葉巻のような青いガラスモザイク作品です。

美術のための建築

美術館の設計では、美術作品が主役。建築はあくまで背景に徹することが大切だと思っています。

・岩手県立美術館（2000）

ロビーでも展示ができるように、南北に長く、各展示室につながる 2 層吹抜けのグランドギャラリーを設けました。目の前の盛岡中央公園と連続し、大階段やスロープで視線が移動し、トップライトから自然光が注ぐこの大空間は､インスタレーションやパフォーマンスの他、各種イベントにも使われています。

・山種美術館（2009）

恵比寿駅から駒沢通りを北へ、丘を登り切った右手に現れる建築には 1 階ロビーの窓しか見えず､2 ～ 6 階が賃貸オフィスとはわからないデザインとしています。エントランスの正面に地下 1 階の展示室に向かう階段を配置し、上部の横に長い壁面には加山又造による陶板壁画を据えました。オフィスと共用のロビー空間を特徴づける、日本画専門美術館の顔となっています。

●都市デザイン

植物がつくる都市景観

四季折々に変化するランドスケープが、都市スケールのアクティビティを引き立てます。

・アクロス福岡（1995）のステップガーデン

Emilio Ambasz と共に参加した事業コンペで、天神中央公園の緑を捲り上げるように提案した屋上緑化は、アクロス山と呼ばれています。当初から協働した田瀬理夫により、今も毎年の植栽管理計画が更新され、丁寧に管理されているようです。登るたびに､季節ごとの様々な表情を見せてくれます。

・品川インターシティ（1998）とセントラルガーデン

品川駅東口地区の都市計画では、駅前広場に続く歩行者大空間とその両側を通るスカイウェイが位置づけられました。

富山市庁舎 アトリウム
©A to Z Studio（坂口 裕康）

汐留シティセンター
※

岩手県立美術館
筆者撮影

山種美術館　ロビー
© 小池宣夫写真事務所

アクロス福岡
筆者撮影

品川インターシティでは、セントラルガーデン（= 歩行者大空間。デザインは三谷徹）を、超高層オフィスの共用部からも眺められるようにデザインしました。

・札幌三井 JPビルディングと札幌市北三条広場（2014）

老朽化による共同建て替えに伴い、都市再生特区の制度を用いて、北海道庁赤煉瓦庁舎を正面に望む北三条通を広場に変えました（通称アカプラ。デザインは団塚栄喜）。土木遺産に指定された大正時代の木塊れんが舗装と銀杏並木を保存し、多彩なイベントが行われる札幌市の新しい名所となっています。

・品川駅西口地区（2010～）

再開発等促進区を定める地区計画で、街区中央にある公園と一体的な緑地を拡充整備する方針が定められました。街区全体の完成までには数十年を要する計画ですが、都心の駅前に広がる豊かな緑地と特徴ある地形が「開かれたまち」を支えます。

新旧の建造物が重なる街並み

更新され続ける都心部で、そこにある歴史的建造物を保存／再生して活用できるかどうかが、エリアの価値を左右します。

・旧新橋停車場（2003）

汐留 B 街区の中央に鉄道発祥当時の旧駅舎やプラットホームの礎石が発掘され、史跡として国の指定を受けています。これを保護しつつ一部を展示し、停車場を復原することが計画の条件でした。錦絵や白黒写真から往時の姿が再現され、超高層が立ち並ぶ都心のエリアに彩を添えています。

・霞が関ビル低層部増築（2009）・東京倶楽部ビル・霞テラス

日本初の超高層オフィスビルは、足元に「人間のための空間」をつくる手段でした。特定街区の指定理由書（1964）に「将来…、…（霞が関ビル等）を既存の物として含む綜合計画の方向へと発展させる」と書かれていた通り、隣接のコモンゲート整備を機に、霞テラス（デザインは Thomas Balsley）という都市広場へと拡張整備されました。

江戸城外堀の石垣、旧文部省庁舎などとともに、霞が関ビルやけやき広場が、重層する土地の記憶を継承しています。

・日本橋二丁目地区（2019）

4 街区にまたがる再開発で、保存活用する日本橋髙島屋 S.C. 本館（高橋貞太郎、増築は村野藤吾）を重要文化財とするべく関係官庁に働きかけ、都市再生特区による開発を組み立てました。新館のファサード（デザインは SOM）は本館と調和する「都市の増築」であり、合間の日本橋ガレリアは賑わいの核となっています。本館の機能は、新築街区の各種設備に支えられています。

●プロジェクトデザイン

「つくる」から「つかう」へ、「たてる」から「そだてる」へ

従来の設計事務所の枠にとらわれず、社会の変化に柔軟に対応しながら、分野横断的な価値創造に取り組んでいます。

・既存完成プロジェクトを育てる仕事

汐留シティセンターの長期修繕計画、アクロス福岡大規模改修のコンストラクションマネジメント、山種美術館前への「醍醐」の桜植樹などは、末永く建築を使うための仕事です。

・不動産活用サステナビリティ方針アドバイザリー（2022）

SDGs や脱炭素の潮流と、某企業による保有不動産の活用とをどう整合させるか、という問いに応えつつ、将来に亘って当事者が自ら運用できる方針を立てるお手伝いをしました。

・団地再生（2021～）

建築とランドスケープの融合を礎にした団地再生ビジョンの策定。住民が暮らしながら段階的に風景が変化していく事業において、プロセス自体もデザインの対象とし、関係者との共創を持続するためのガイドラインを検討しています。

・国立新美術館の建築ツアー（2017～）、SDGsテラス（2020～）

創立 50 周年を機に設計事務所の社会貢献として建築ツアーガイドを開始。社内では SDGs 関連の研究活動を継続中です。

品川インターシティ＋セントラルガーデン
※

札幌三井 JP ビルディング＋アカプラ
※

東京倶楽部ビル、霞が関ビル＋霞テラス
※

日本橋二丁目地区＋日本橋ガレリア
※

※：© 川澄・小林研二写真事務所

第 16 回 aaca
長野・松本・茅野地区建物視察会

日本建築美術工芸協会法人会員
株式会社梓設計　CX室
斎藤 博太郎

長野から松本、茅野まで 10 月 28 日より 2 日間、バス移動で恒例の建物視察会に参加させて頂きました。建物視察会の基本コンセプトの 1 つとして掲げられておられる「設計者や施設に深く関わる方に現地解説して頂く」という主旨の元、プランツアソシエイツ宮崎浩氏、松本透長野県立美術館長、東京大学名誉教授藤森照信氏に現地で解説を頂くという貴重な機会を頂き、充実した視察会に準備頂きました皆様へ改めて感謝の気持ちでいっぱいです。僭越ながら見学感想文を寄稿させて頂きます。

まず 1 日目は長野県立美術館～安曇野ちひろ美術館～高橋節郎記念館～碌山美術館といった工程でした。

・長野県立美術館（プランツアソシエイツ）

2021 年に竣工し日本建築学会賞、AACA 賞など多数の受賞歴がある話題の建物を宮崎浩氏と松本透館長に御案内頂いた。敷地は善光寺と正対し谷口吉生氏設計の東山魁夷館に隣接、元々は林昌二氏の信濃美術館があった場所であり、とてつもない緊張感のあるプロジェクトであったことは想像に難くない。そのような状況において善光寺の軸と東山魁夷館の軸からなる 2 つの都市軸を設定し、既存の名建築を引き立てると同時に新設美術館は敷地の高低差を活かし、そっと置かれているような佇まいに感銘を受けた。美術館計画として施設内の大部分がフリーゾーンになっており、松本館長の公共施設の運営に対する姿勢に強い尊敬の念を抱いた。また外装、階段、展示天井など細部にわたり極めて完成度の高いデザインが施されているのと同時にランドスケープと一体感のある空間構成が大変勉強になる建築であった。

・安曇野高橋節郎記念美術館（プランツアソシエイツ）

長野から松本に向かう移動の途中で急遽見学をすることになった宮崎浩氏の作品。事前予約もなく突然の訪問にも関わらず、学芸員の方が宮崎浩氏を見るやいなや氏に駆け寄り、氏に挨拶をされていた光景を目の当たりにし、施主と建築家の幸せな関係が良い建築を作るための必要条件であることを改めて感じさせられた。急な訪問であったこともあり外部空間をメインとしての見学になったが、田園風景に囲まれた場所に立つ建物としてボリューム感を感じさせない構成、水盤と一体の端正なデザインがとても印象的な施設であった。当日水盤がメンテナンス中ということで、水景のない中での見学であったため、別の機会に水盤のある状態でまた訪れたいと思った。

長野県立美術館・安曇野高橋節郎美術館の 2 作品を宮崎浩氏に現地解説を頂き、大変勉強になったことはいうまでもないのだが、何よりも氏のプロジェクトに対しての熱量と建築家としての姿勢に強い感銘と同時に襟を正す思いであった。

・安曇野ちひろ美術館（内藤廣建築設計事務所）

1997 年竣工の絵本美術館で、連続する小さな切妻屋根の建物と遠くに見える白馬連山の風景が呼応した建築である。左官仕上の RC 土台に製材からなる木架構の屋根がかかりアーチ状の木部材が棟を受ける架構が印象的で美しかった。

・碌山美術館（今井兼次）

彫刻家の萩原碌山の作品が集まる美術館である。複数棟からなる構成でそのうち教会風のかたちをした碌山館が今井兼次氏の設計。色と形が不揃いな煉瓦の壁がつたで覆われているその佇まいは、まるでジブリの世界に迷い込んだかのような錯覚を受ける。

最近の話題作から近代の名建築まで大変充実した 1 日目の視察工程を終えて松本駅前のホテルに宿泊した。

2 日目は松本市美術館～片倉館～神長官守矢史料館、高部公民館、高過庵、低過庵、空飛ぶ泥舟、茶屋「五庵」を巡る 1 日目と同じく濃密な工程でした。

・松本市美術館（宮本忠長建築設計事務所）

2002年竣工の宮本忠長建築設計事務所設計による美術館である。中庭を囲うようにボリュームの大きな本館と別棟のスケールが抑えられたこども創作室・カフェが配され、中庭の抜け感が気持ちの良い空間であった。

エントランスロビーから広がるホワイエは半透明のカーテンウォールから自然光が透けて満たされる大空間は建築としての見どころの一つであった。

・片倉館

諏訪湖に面して建つ国指定の重要文化財で現役の浴場厚生施設である。洋館風の意匠が印象的な建物で資料室のある会館棟と貸広間を見学させて頂く。現役の施設のため有名な千人風呂の見学は叶わなかったが、貸広間の木格子天井とモダンな照明、洋風の格子窓と内部の木造和室大広間等見応えのある和洋折衷の空間であった。

・神長官守矢史料館、高部公民館（藤森照信）

茅野市高部地区出身の藤森輝信氏が設計したフジモリ建築を氏のご案内で見学させて頂いた。フジモリ建築の特徴のひとつであるひとの手作業の痕跡が残る建物は、モノづくりの初心に帰る気持ちにさせられる思いである。自作の焼杉壁、丸太柱と基礎をつなぐ銅板プレート、藁を練りこんだ三和土、打出し加工の鉄板スイッチプレート、和紙の照明、開けた蔀戸を支える小枝方杖など枚挙に遑がないが、氏の創意工夫が溢れる建築であった。

・高過庵、低過庵、空飛ぶ泥舟、茶屋「五庵」（藤森照信）

昨今一般メディアでもよく目にする藤森氏の設計した茶室である。各施設とも小規模であったことから、5班に分かれての視察となった。筆者の班では茶屋「五庵」にて藤森氏と一緒に梯子を上り、庵から臨む八ヶ岳の思い出のお話を聞くことのできる機会に恵まれ、純粋に楽しい経験であった。

また各茶室の見学の合間に藤森氏の生家にお伺いし、氏のデザインしたテーブルセットや土間の茶室を見学させて頂いた。またその際、奥さまからお茶をごちそうになるなどお気遣い頂いた事についても、この場をお借りして改めて御礼を申し上げたい。

2日間の視察会を通し、天候にも恵まれて、紅葉の色づく信州の風景、aaca会員の皆様、宮崎浩氏との交流楽しむことができ大変満足の経験でした。

建物視察会に参加して

学習院大学
日本建築美術工芸協会会員　田上 竜也

10 月 28 日、29 日の 2 日間、「第 16 回 aaca 建物視察会 2022- 長野・松本・茅野地区」に参加した。初日朝、長野駅に集合。気持ちのいい秋晴れで、長引くコロナ禍のなか本格的なツアーを待ち望んでいたかのように大型バスに満載となった参加者ともども、旅行気分はいやが上にも高まる。

最初の目的地、長野県立美術館では、設計者の宮崎浩氏と松本透美術館長による解説を聴きながら館の内外を周るという、贅沢な機会となった。レセプションルームでの説明後、全員で幻想的な霧の彫刻を体験し、それから館内を巡ったが、美術館は無料のオープンスペースを広く取り、外の庭園を含め市民に開放された空間で、3 階屋上庭園やガラス貼りエレベーター内などの随所から、以前ははっきり見られなかった善光寺の側面全景を見渡すことができる。美術館本館と善光寺、神社、東山魁夷館との関係性が緻密に計算されており、東山魁夷館に対して正面を向いた連絡ブリッジや、階段手摺の形状に至るまで谷口建築との調和を図っている。展示替え期間中の展示室を特別に上から眺めた後、バックヤードを見学させていただいたが、応接室の壁面に張られた信州紬や、漆塗りのテーブル、さらにジオ・ポンティの椅子が置かれたトイレなど、隅々までデザインされた空間に感銘を受けた。既存の環境を破壊することなく、景観を整理しつつ新たな魅力とともに再創造し、さらに建て替え以前にあった林昌二による長野県信濃美術館の部材を一部移設するなど、過去との連続性にも配慮を尽くした建築と感じた。

続いて車内で弁当を食べながら、場所によってはかなり紅葉の進んだ景色を窓外に見やりつつ、安曇野ちひろ美術館（設計・内藤廣）へ移動する。2 班に分かれてまず美術館スタッフにより建物外観と館内を案内された。山の稜線と合わせたエントランスの切妻や、自ら内藤氏に手紙を書いて志願したという中村好文氏デザインの椅子などについて説明を受けた後、自由見学となった。自治体が広大な敷地を提供することで誘致した美術館だが、その空間全体のランドスケープ含めて内藤氏の手になるものであり、トットちゃんゆかりの電車教室、ちひろの別荘などを巧みに配置した遊歩道を楽しみながら散策した。

次に訪れた碌山美術館では、今井兼次の代表作である、教会を模した展示棟のみならず、その後に建てられた数館を巡り、萩原守衛や高村光太郎による、日本近代彫刻黎明期の作品群を鑑賞した。

さらに予定外のサプライズとして、近隣にある宮崎氏の代表作のひとつ安曇野高橋節郎記念美術館を訪問した。周囲の木々の高さを超えない控えめながらも端正な建築で、あいにく閉館間際のことで展示スペースには入らなかったが、庭や建物外観を見学した。思わぬ宮崎氏の訪問に、美術館スタッフの方々もいつまでも興奮さめやらぬ様子だった。

松本のホテルに到着し、その夜はコロナ感染対策として、全体での懇親会は開かれず、銘々が街に繰り出すこととなった。後で聞いたところでは店により旅行支援クーポンの扱いはまちまちであったようだが、個人やグループで、みな信州の夜を満喫したとのことである。

2 日目も初日に引き続き、これ以上ないほどの旅行日和となった。ホテル前から出発したバスは、まず市内の松本市美術館（設計・宮本忠長）に向かう。松本出身の草間弥生作品を中心に据え、建物正面ガラスや飲料の自動販売機にまで水玉をあしらった演出は趣味の分かれるところだが、外国からの訪問客も数多く目にし、観光客誘致には成功している印象を受けた。

その後バスは、松本を後にして諏訪方面へ。途中、下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館（設計・伊東豊雄）を窓外に望む。陽光に輝く建物は広大な諏訪湖の各所より眼にすることができ、一帯のランドマークとなっている。

バスを降りて訪れた上諏訪の片倉館（設計・森山松之助）は、諏訪市文化財担当や施設ガイドの方々のご案内で、和館大広間の大空間や、屋根のシェブロン模様についての解説を受けた。営業時間中のことであり、名物千人風呂の見学はかなわなかったが、何人もが再度の訪問と入浴とを期していた。

続いて茅野に到着後、まず発酵パークに立ち寄り、発酵食品で構成された創意あるランチを食したのち、何人かは土産物を覗いたり、どぶろくを豪快に注いだソフトクリームを賞味したりしていた。

それからいよいよ２日目の目玉といえる藤森照信氏の建築めぐりだが、まず高部公民館では、藤森氏ご自身の飄々とした解説により、焼杉は男性、照明は女性が担当するなど、地域の人々と共同で作られた経緯を知ることができた。道を行く御柱を見るため、木の枝で固定する突き上げ窓の単純ながら味のある工夫には、思わず笑みがこぼれた。

神長官守矢史料館に移動し全員で見学した後は、少人数毎のグループに分かれて点在する茶室群を回り、藤森氏や共同設計者の吉川一久氏に解説いただいた。空飛ぶ泥舟や高過庵の揺れっぷりを歓声、悲鳴まじりに実地体験し、屋根がスライドする低過庵の仕掛けに驚嘆するなか、同行した宮崎氏のはからずもおっしゃった「建築するのが馬鹿らしくなる」という言葉は、藤森建築への最高のオマージュと受け取れた。我々のグループが最後に訪れた藤森氏の実家では、奥様に懇切に応対していただいた。玄関をその場で茶を提供可能に転用した玄庵や、龍を描いた襖絵、角を生やした「王様の椅子」の置かれた食堂など、まさに藤森ワールド炸裂である。

最後は茅野駅で解散となったが、個人的にはひさしぶりの大勢での団体ツアーで、会員の方々はじめ、多くの参加者と交流することができ、とりわけ宮崎浩氏と藤森照信氏のお話を実地にうかがえたことは得難い経験となった。コロナ禍のいまだおさまらぬなか、細心の注意を払いつつ旅行を企画いただいたみなさまには、あらためて感謝申し上げる。

フォーラム委員会だより

第 200 回 aaca フォーラム開催報告
「素顔の巨匠たち」
ー長谷川智恵子さんの講演会ー

Atelier K アトリエ･ケイ一級建築士事務所
日本建築美術工芸協会会員
柏尾　栄

秋も深まりコロナ禍もやや下火の週末、11 月 26 日（土）に笠間日動美術館において、記念すべき第 200 回の aaca フォーラムが開催されました。参加者 25 名、現地集合・現地解散で、多くの方は常磐線特急利用で東京から 1 時間強、友部駅からの笠間観光周遊バス十数分でのご到着、朝は少し雨に降られましたがランチ時には止んでくれました。

笠間稲荷の近く、笠間城の城山の麓に立地する美術館は、自然溢れる環境の中、芦原太郎氏設計の企画展示館からフランス館の間には、紅葉に囲まれたブリッジの先に清々しい竹林と緑の中の屋外彫刻庭園があり、講演前のしばしの間、フランス館の名品鑑賞とともに心洗われる環境に浸ることができました。ちなみにここは江戸初期、浅野家が赤穂に転封になる前二十数年間治めた城跡だそうで、美術館玄関横には家老大石家の屋敷跡がありました。

講演は、1 階にパレットコレクションの展示があるパレット館の最上階で行われました。画家たちに愛用のパレットに少し絵を加えて提供して下さいと集まった 370 点（当初 150 点）のパレットが展示されていました、それぞれの画家の魂の集積です。

長谷川智恵子さんの講演は、長谷川家が画廊を開くルーツのお話から始まりました。代々長崎蘭学医だった先祖から、二代前は心の医者と言われる牧師、そしてお父様は「これからは油絵を極めよう」と画廊開業へ。代々共通する思いは、人を癒す志だと感じました。

さて、本題の「素顔の巨匠たち」のお話。長谷川さんは TV 番組がきっかけで初めて有名画家ダリやミロへのインタビューを行い、その後、当初不安なところを励まされながら執筆活動に挑戦し、現在の多くの著作が生まれたそうです。

長谷川さんが直にお会いになった昔の画家・巨匠の素顔は、「今の画家は常識人で穏やか過ぎて逆に心配」といわれるのとは対照的に、それぞれとても個性的でした。短い時間のふれあいだけでも振る舞いや話の内容が濃密で、インタビューの執筆は「下手な文章でも書けた」と謙遜されています。今回の講演では、その個性的な巨匠の素顔との数多いエピソードの一部を楽しく聞かせていただきました。

その中の一部を断片的になりますが紹介しますと、

ピカソ：20 歳のころは普通の絵を描いていたが、奥さんが変わるたび画風が変わっていった。子息クロードによれば、お金の持ち方使い方に無頓着でトランクに現金を入れていた、子供の映画代も桁違いで渡すことがあった。遺族に残された膨大な作品は相続税としてフランス政府に物納され、ピカソ美術館ができた。

ダリ：「今世紀最高の画家は？」の質問に「自分」と答える自負心。撮影もインタビューもすべてやりたいように指示し、プロデュ―サーそのもの。徹底した女性蔑視に驚いた。食事会での「本物の女性」と R. バートン氏が言う美人も男性だった。ただし妻ガラは別。

ミロ：インタビューはほとんど受けてくれないにもかかわらず会えて幸運だった。かわいくニコニコしていてあまりしゃべらない人だが温かく話す。日本びいき、黒が好きで日本の書道が好きと言っていた。

シャガール：南仏で奥さんと共にインタビューできた。OK とるのに 2 年、日本大使の同行でやっと成功。町であってもわからないような普通の人だった。「私は平凡な絵描き、特別なことは言えない」と話され、予定時間 15 分きっかりで「あとは妻と話して･･･」とアトリエへ。ユダヤ系ロシア人で、「愛と平和が最も大切」と思い、故郷ヴィテブスクの子供心の思い出やバイオリン弾きやサーカスが作品のモチーフ。「フランスは頭の国だが、日本は魂と心の国」と評価している。何度も「私は平凡な絵描きなだけです」と繰り返された。

梅原龍三郎：晩年、長谷川夫妻で滞在中のパリのホテルを訪問したが、絵はホテルの大部屋で描いており、食事は高級レストランで。健啖家でフランス料理・こってり料理がお好きで、酒はストレートどぼどぼ。長谷川さんにローストビーフを作ってくれたことがあったが、ナポレオン漬

企画展示館の玄関

左：フランス館　右：パレット館

屋外彫刻庭園（見下ろし）

（見上げ）

けだった。長生きをされた。本物・高価なものが好きで一流の有名人と交友。「絵は商品ではない」と気前よく人にあげることもあった。税金払うのはいや、葬式は生きている人に迷惑なので挙げないとも。長谷川さんのポートレートを 15 分で描いてくれた。礼節を大切にし、紺のスーツなど着てシックでお洒落な方だった。

その他：奥谷博、鴨井玲の各氏との話もありました。

このように、講演では著名画家に直に接した方からしか聞くことのできない貴重で興味深い数々のエピソードや人となりについてのお話を聞くことができました。作家の人柄を知ると、作品を見る見方が深くなり、変わってくるような気がします。（数々の巨匠のインタビューエピソードは、ぜひ長谷川さんの著書「「美」の巨匠たち」（講談社）などをご覧ください）

そのあと参加者からの質疑応答を受けていただき、最後のくくりには、

「絵の見方は好きと嫌いでいい、自分の好きな作家、好きなものを探して気楽に接したらいいです、一つでもいいから好きなものを見つけてください。」との言葉をいただき、大きな拍手で終了しました。

終了後の会場で、著作の笠間日動美術館名作選「思い出の作品たち」（海外編）（日本編）を特別価格で販売いただき、購入者にはサインをいただきました。

講演の後は、町中に出ての 1 時間ほどのランチタイム。参加のほとんどの皆さんで「ひげの café」に入ることができました。いきなり大勢の来客で店主はてんやわんやでしたが、参加者同士の楽しい会話がはずみました。その後美術館に再入場し、周遊バスの出発時刻まで 1 時間ほど、開館 50 周年記念企画展「夭折の画家たち」を鑑賞ののち、15 時頃無事フォーラムは終了、現地解散、楽しい思い出をのせて観光周遊バスで帰路につきました。

笠間は笠間稲荷を中心に、日動美術館とその分館「春風萬里荘」（魯山人旧居の移築）、芸術の森公園の茨城県陶芸美術館もある、こぢんまりとしたいい街です。少し足を延ばせば益子の街、「かさましこ」といわれる笠間・益子は私のように陶芸に興味があるものにはたまらないエリアです。東京から近いので、まだ足をお運びでない方はぜひゆっくり訪れていただきたいと思いました。

講演風景

興味深いエピソード

サイン会

参加の皆さんと記念撮影（中央　長谷川さんと東條会長）

「市中の山居」を探るキーが“池”に？ Ⅲ

情報文化研究委員会
栗田祥弘

長く人の心に残るもの。時代が変わっても生き続けるもの。心象風景。その様な普遍性のあるスペシャルな場に人々は心を躍らせ、時代に合った文化を創り続けてきた。様々な過渡期、変換点を迎えている今の時代において、改めてこの「変わらないもの」への理解を深めることで未来に対する正当な投資ができるのではないだろうか。

日本の都市部は、近年大都市であるメトロポリスがつながりメガロポリスと呼ばれる超高密度巨大都市群となってきた。それが短時間の間に急速に作られていった。周辺の風景が急速に変わるなか、人の心に残り続けている変わらないものは何であろうかと議論をもちよった。そこで出てきたものは「池」であったり「森」であったり「山」の景色だったり、構築物だと東京タワーなどがでた。建築などの人工物よりも自然を感じさせるものの方が多かったのが印象的であった。この議論は正式な調査ではないし、年齢や感性の偏った人たちの意見でしかないが、そこから感じられるのは、特に都市部において「自然」という「変わらないもの」を求め、心象風景の記憶に焼き付けているように感じる。

高密度な都市の中に「自然」を求めるという考え方は昔からあったようだ。そのひとつに「市中の山居」という言葉がある。直訳すると「都市に山の住処をつくること」となるが、もう少し広くとらえるのであればこのようにも読めないだろうか。
「市中の山居」とは「都市の中で自然とどのようにつながるかの方策。都市の中にあり、人工的文化的でありながら、自然とつながっているところ」を指す。

自然との繋がりは、時として災害という負の恩恵も少なくなかった。歴史の中で様々な事業が行われた結果、人の住める場所を作っていった経緯が日本にはある。近代に入りその動きはより急速に、より合理的になっていった。その結果作られたのがカミソリ堤防であったり、渋谷川などの暗渠河川や地下の雨水貯留槽、垂直コンクリート護岸に落下防止の大型フェンスが取り付けられた調整池であったりした。近代において高度経済成長の中、人が生活するために自然と距離を置く方法を近代日本の都市計画ではおこなってきたように思う。21世紀になり、人口減少や成熟社会、SDGsなどの議論も声高にされるようになってくると、人々はまた自然と寄り添って生きていきたいという思いが強くなっているのかもしれない。

非日常時の災害時対策は考えながら、日常時は都市部でももっと自然と繋がって生活したいという現代人のささやかな願いが生まれている。このような実例はどのようなものがあるだろうか。調べていくと「池」、特に水害対策としての機能をもつ土木工作物である「調整池」や「調節池」が人や社会とつながる形で新しく作られているものがあることに気づいた。それが新しい都市や社会をつくるにあたって大きな価値や可能性を示し始めていると分かった。今までイメージされてきた垂直コンクリート護岸の荒々しい人の気配のない土木工作物の池が、都市の中心となり水害対策も施しながら生態系にも寄与する「人の居場所」になる場所へと新しく変貌し複合化し始めている。以下に情報文化研究委員会で現地調査をおこなった3つの池を紹介する。

高ヶ坂松葉調整池（こがさかまつばちょうせいち）

東京都町田市の住宅街にある高ヶ坂の松葉調整池。通称「めだか池」。1998年の区画整理事業により築造された調整池を、1999年環境庁所管「自然共生型地域づくり事業」の補助を得て、豊富な湧水を活かしビオトープとして整備した。垂直コンクリート護岸と1.8mのフェンスで囲まれた池だが、ビオトープ機能を維持するために最低保水量を確保できる仕組みとし、地域住民やNPO法人（鶴見川源流ネットワーク）が自発的に清掃活動や自然観察会などをおこなっている。

高ヶ坂松葉調整池

越谷レイクタウン大相模調節池（おおさがみちょうせつち）

埼玉県越谷市にある大相模調節池。UR 都市再生機構が埼玉県の同意を得て越谷レイクタウンの地区中央に設置した池である。越谷市が推進する地区整備事業である越谷レイクタウン事業の一環として施工され（1996 年に特定土地区画整備事業決定、2008 年に町開き）、「新しく水と共存文化を創造する都市」をスローガンに、水害対策を考慮しながら地域住民の憩いの場として池の一部を開放し自由に利用できるようになっている。元荒川と接続して水害時の河川の水量を調節する機能を持つが、平常時も一定の水量を入れることで池の水質を保ちビオトープ機能も持つ。垂直護岸は最小限になり、1.8m のフェンスも低めのフェンスに代わり景観には一定の配慮をおこなっている。水辺の地域活動としてはフェスとして「Lake and Peace」、アクティビティやキャンプ体験として「越谷技博」、「レイクタウンランニング」や「越谷いちごラン」なども行われている。

柏の葉キャンパス・アクアテラス

千葉県柏市に作られた柏の葉キャンパス内に作られたアクアテラスと呼ばれる調整池。柏の葉キャンパス駅周辺で進む「柏北部中央地区一体型特定土地区画整理事業」（2000 年）の一部として整備された従来型の調整池を、大規模改修して 2016 年に一般公開された親水公園。調整池が持つ空間資源としての可能性に着目し、「見るだけの池から触れ合える水辺へ―治水機能と親水性を両立した多様で寛容なパブリックスペースの創出」をテーマとした。まちづくりを推進する UDCK（柏の葉アーバンデザインセンター）と、公共（区画整理事業者：千葉県、管理者：柏市）と民間事業者（三井不動産を主とする周辺地権者）と学問機関（東京大学、千葉大学）の連携による高質化を実現。1.8m のフェンスは無くし、手摺のデザインも軽やかにし、水辺との境界は植物を設けることで人工的な手摺を無くす工夫をしている。池の管理スキームも新たに構築し、維持管理および価値向上に努めている。

新しく都市をつくる中で、高密度に建築を埋めるだけではない解決案が出てきていると感じる。「自然」を大胆に取り込んだ安全なまちを人々が望んでいるのかもしれない。今回の 3 つの池は「防災」と「自然」という複合用途に「人の居場所」を設けている。さまざまな境界を越えて市中の山居を創っている例ではないだろうか。建築美術工芸協会は様々な分野や領域を超えて未来を語る場にしたいと考えている。これらの実例を踏まえて、未来の新しい都市の在り方を、境界を越えて探っていく一助にしたい。そのためにもこれらの池の実務者たちの話を伺い、未来のまちの可能性を探っていきたい。

越谷レイクタウン大相模調節池（おおさがみちょうせつち）

柏の葉キャンパス・アクアテラス

事務局だより

■事務局長　交代について

２月１日付けにて石田事務局長から二本柳新事務局長に引き継がれました。二本柳新事務局長をご支援ください。

ー 訃　報 ー　　心からお悔やみ申し上げます。

個人会員・総務委員　**松本哲夫 氏**
2 月 1 日逝去　1929 年生　享年 93 歳

履　歴　1953 年　千葉大学工学部建築学科卒
　　通産省工業技術院産業工芸試験所技官
　　1957 年　剣持勇デザイン研究所チーフデザイナー
　　1970 年　(株) 剣持デザイン研究所代表取締役
協会歴　1963 年～ 2023 年　個人会員
　　1996 年～ 2023 年　総務委員会委員
作　品　ホテル日航サイパン、京王プラザホテル、
　　山形市庁舎、新幹線車両他

個人会員・総務委員　**稲葉亘快 氏**
2 月 3 日逝去　1932 年生　享年 90 歳

履　歴　宣弘社社員
協会歴　1963 年～ 2023 年　個人会員
　　2000 年～ 2003 年　多様文化委員会委員長
　　2004 年～ 2023 年　総務委員会委員

■新入会員・会員の異動　2022年4月～2022年10月（敬称略）

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名・活動分野、 法人会員は会社名・代表者・担当者氏名・会社住所を記載します。

《新入会員》

個人会員	石原和幸	(株) 石原和幸デザイン研究所
	市村陽子	Ergo エルゴ
	伊藤俊司	昭和リーフ (株)
	遠藤克彦	(株) 遠藤克彦建築研究所
	佐藤達保	建築家
	仲　俊治	(株) 仲建築設計スタジオ
	中村ノリコ	皮革工芸家
	堀井大輔	(合) ランドスケープ81
	渡辺弘道	野村不動産 (株)

法人会員	(株) SO&CO.	代表取締役 照内　創 担当者 照内　創	〒162-0065 新宿区住吉町10-10 TEL. 03-5925-8388
	(株) 東海林健建築設計事務所	代表取締役 東海林　健 担当者 今田悠貴	〒951-8104 新潟県新潟市中央区 西大畑町591-1 異人池ハウス 202 TEL. 025-227-6639

《会員の異動》

法人会員	会社名変更	emo (株)	(前　フィールド・クラブ (株))
	役職変更	日本設計 (株)	常任顧問　福田卓司 (前　副社長　福田卓司)
	担当者変更	(株) LIXLE	白木優光 (前　田尻　明)
	住所変更	(株) オカムラ	〒107-0052 港区赤坂1-8-1 赤坂インターシティAIR 13階 TEL. 03-6744-6306

編集後記

会報では、会員の皆様のご活動を「会員活動レポート」としてご紹介しておりますが、本号から「展覧会活動報告」というページを設け、会員の皆様が開催された、あるいは参加された個展、グループ展、団体展の様子を紹介いたしました。今後も会員の方々が参加される展覧会の取材に伺いますので、開催の案内を広報委員会まで是非お寄せください。なお会員の皆様の活動報告は、展覧会だけではなく、建築作品の発表、地元での活動など幅広くご紹介してまいります。会報は、会員の皆様の交流の場でもありますので、皆様からの情報をお待ちしております。　（飯田郷介）

aaca 2023.4 no.94

発行人　会長 東條　隆郎
発　行　一般社団法人 日本建築美術工芸協会
　　〒 108-0014
　　東京都港区芝 5-26-20　建築会館 6 階
　　TEL　03-3457-7998　FAX　03-3457-1598
　　URL　http://www.aacajp.com
　　E-Mail　info@aacajp.com

編　集　広報委員会
　　委員長　飯田郷介
　　副委員長　田島一宏
　　委員　青木恵美子　勝山里美　金原京子
　　竹生田正　竹内春香　中村弘子
　　森田高年　山崎和子　山下治子
　　吉田　誠

編集制作協力　株式会社 アム・プロモーション